

記は侍従武官という立場からいわば「菊のカーテン」の向こう側の世界をからま見せてくれる。摂政設置前後の宮中の暗い雰囲気の記事、摂政設置決定後に大正天皇が不快の表情を示したとの記述もある。

ただし本書は日記全文ではなく抜粋である。凡例によれば、宮中の状況・政府要人や軍首脳の動きに関する記事はほとんど余すところなく集録し、家庭内の私的な事項は相当部分を省略したとのことである。日記原文はカタカナであったが本書ではひらがなに改められている。

以上、本書は、一応非政治化(?)されたかみえる宮中が支配体制内で実際にどのような機能を果たそうとするかの一端を示す点で、近代天皇制の変遷を具体的に跡づける際の興味深い資料であるといえよう。

(四六判 四六三頁 一九八〇年十二月
美濃書房 三三〇〇円)
松延秀一 京都大学大学院生

Tungen Golte

Repartos y rebeliones :

Túpac Amaru y las contradicciones de la economía colonial

本書は Warenverteilung und Bauernrebellionen in Vizekönigreich Perú (1751-1783), Berlin, Lateinamerika-Institut, 1977 の西語版である。原書刊行三年にして、ネルーの Instituto de Estudios Peruanos から西語版が刊行されたのは、一九八〇年がいわゆるトゥバク・アマールの総反乱二百周年にあたることが背景になつていたと考えられる。

トゥバク・アマールの総反乱を「反植民地主義運動、社会正義と政治的独立運動の復権者にして先駆者の運動」と解釈したタニエル・バルカセルの古典的著作 La rebelión de Túpac Amaru, México, F. C. E., 1947 の評価は、かなり一般的なものとみてよい。一九七一年に Colección documental de la Independencia del

Perú の第二部として、三巻からなる「トゥバク・アマール反乱」史料集が刊行されたことからも、そのことは察知できよう。

しかし、七〇年代になって、従来の研究では等閑視された諸側面の解明が試みられてきた。Flores Galindo et al. Sociedad colonial y sublevaciones populares; Túpac Amaru II, 1780, Lima, I. N. I. D., E. 1976 に所収された諸論文では、反乱参加者の社会的構成、反乱参加者を結合していた「世界観」をはじめとするイデオロギ一的諸側面(ミレナリスモ・ナティビスモなど)総決起を可能とした地域的ならびに全般的情勢などの分析が提出されている。本書の著者は、一七五一年から一七八〇年の間にリマ副王領に導入されたレバルト制(repartoあるいは repartimiento mercantil, repartimiento de efectos)にもなう植民地経済体制の動向に焦点をあて、一七六五年から一七八三年の間に継続的に生じた農民反乱、農民闘争との関係を究明しようとしている。レバルト制は、副王領の地方行政体の長であるコレヒドールが、

国内産および輸入織物類、ロバ、ココなどの商品を、管内内の農民たちに強制的に割りあて、その支払いを強要する仕組みになっていた。このレパルト制は、ミタ制、貢納制などともに、反乱者たちが、その廃止を強く求めたものであった。

第一章では、一八世紀におけるペルー副王領における鉱山、織物工場、大農園の生産と、それらを基盤とした対外貿易が、同時期のイギリスの工業生産増加率をかなり上まわるスピードで上昇していったことが示されとりわけ、レパルト制導入により、それが拍車をかけられていることが明白となる。第二章では、一八世紀中期以降の人口増加、人口にしめる原住民人口比の地域差、原住民労働力の徴発形態、いわゆる「よその原住民」(Forasteros)の比率の地域差、労賃条件、貢納制、ミタ制などの諸指標についての考察が、統計表、統計地図を多用して、わかりやすく進められている。

第三章では、レパルト制の実態が描写されている。副王庁上級官僚に占めるクリオ

ーリオ比の急増、コレヒドールの収支バランス、レパルトの対象となった商品の地域毎の構成差と割当額の差、商品割当価格の恣意性などが、図表を駆使して、論及されている。第四章では、レパルト制廃止を要求する訴訟、一七三〇—一八〇年にかけての農民反乱の傾向、一七六五—七九年にみられた八〇の反乱の攻撃対象の紹介がなされている。そして、各事例において、原住民領主(カシケ)、司祭、地方に居住する非原住民層(メスチソ、クリオーリオ)の示した態度、役割が概観される。そして最後に、一七八〇年の総反乱が、なぜペルー副

王領の大半をまきこむ形で起きたのかという最大の難問について、生産力に対するレパルト割当て額の示教の地域差、副王庁・リマ金融商業ブルジョアジーに対するカシケの政治的同盟の意義などが考察されている。第五章では、レパルト制廃止とインテンデンシア制導入、リマ商人の対外貿易独占権廃止など「諸改革」と、副王領の経済体制の瓦解が記述されている。

ペルー副王領の経済体制のかかえていた

内部市場と労働市場の狭小性を打破する方策として、リマの金融・商業ブルジョアジーのヘゲモニーで導入されたレパルト制は、リマという植民地内のメトロポリスへの従属が比較的緩かであったシエラ(山岳地域)の原住民・農民の生活基盤を崩壊させるだけでなく、小規模な商人・運送業者の反発をもひきおこしたといえよう。

本書は、明確な回答を保留したかたちになっているが、二八葉もの統計地図、三〇〇を越す統計表に結実したかたちの幾多の未刊行文書類の分析整理を手掛りに、読者なりに納得のいく答をひきだすことができるであろう。

(二五六頁 一九八〇年 Lima, Instituto de Estudios Peruanos)

(小林致広 神戸市外国語大学講師)

受贈図書

(一九八〇年二月一日～五月一七日)

原秀三郎著 日本古代国家史研究(東京大学出版会)

史朋(史朋同人) 一五

東京学芸大学紀要 三一